

日本列島上の歴史と文化における分布境界線 “関東・越後線群”

——人類学・考古学・民俗学・気候学篇——地図集 II——

安 部 清 哉

Cultural Demarkation Line “Kanto-Echigo Lines”; Its Anthropological, Archaeological and Ethnological Implications II

キーワード＝文化境界線・東西対立分布・文化・気候・言語・関東

越後線

はじめに

本稿は、日本列島上の文化的諸現象に見られるある種の分布境界線群（仮称「関東・越後線群」）について、当該地図を提示し、1 その文化論的問題、2 境界線の類型、3 地域的区分、4 地名の名付けについて、簡単な解説と考察を付すものである。

なお、本稿は、一連の拙稿、安部（1997b・1998a・

1998b・1998c）に続くもので、ついでには考古学・民俗学・気候学・動物学・植物学・土壌学・地名学・地理学・歴史学関係の当該候補地図を提示する。

一、 “関東・越後線群” の文化論的問題

日本列島上の文化的現象には、広く人類学・考古学・民俗学・気候学・動物学・植物学・土壌学・地名学・地理学・歴史学、そして、言語学などの諸領域にわたって、ある種の位置的類似性をもつ分布境界線が認められる。

その境界線は、主に、関東地方から北陸（ないし山陰）地方の間を横切っていて、日本列島上の文化的特徴を二分しているかのような特徴をもっている。しかし、これまでの研究では、このような位置を走る分布境界線は、まったくといってよいほど問題とされてこ

なかった。

これまでの諸研究では、日本列島上の文化的相違としては、日本の中央部（およそフォッサ・マグナ上、ないし、主に中部地方）を境界線とするような、いわゆる「東西対立」が挙げられてきている。拙論で指摘するような境界線が、これまであまり注目されてこなかった理由の一つとしては、この「東西対立」という一つの区分範疇のみが唯一であるかのような前提としてとらえられ、それ以外の相違への視点は、意識的無意識的を問わず、展開させにくかったことがあるように思われる。

実際、本稿や安部（1998a、1998b）でも挙げた分布地図の中には、これまで「東西対立」の一つとして扱われてきたものが少なからず認められる。いずれも日本列島の中央部でのいわゆる「東西対立」に当たるものとして、概略ひと括りに扱われてきたのである（注1）。

しかし、それら、日本の中央部で東西に二分されるような、いわゆる「東西対立」分布と、拙論で問題にしている分布境界線とは、その位置・成立背景など、その本質的性質が異なっているように思われる。少なくとも、現時点では、相違があるものが相当数混在している可能性のあることを考慮し、この二者を区別して扱っていく必要があるのではないかと考えられる。

そのような理由から、本稿執筆者は、それら一連の境界線を、従来の東西対立と区別していくために、その位置や特性などの細部の相違はひとまず置いて、仮に「関東・越後線群」（略称「関越線群」）と総称して問題提起してみることにした。今後、それらの分布境界線の性質を説明するためにも、該当する分布を出来る限り多く収集し、総合的な視点に立って比較検討する必要があると考える（安部1997b以下の拙稿参照）。

現時点における当該分布地図は、人類学・考古学・民俗学・気候学・動物学・植物学・土壌学・地名学・地理学・歴史学・言語学などの極めて広い領域にわたっている。そのような状況から見ても、この境界線群は、今後、日本列島上の文化形成史を考える上でも、学際的研究領域に互って広く研究していく必要がある課題であると思われる。

二、「関東・越後線群」の一類型

いわゆる「東西対立」とは異なる。この関越線群の研究を進めるためには、その候補と考えられる当該分布地図を多く収集し、そこにあるどのような類型と特徴が見られるかを考察していく必要がある。

当該分布地図としては、これまでの研究の中からその候補と考えられた地図を、安部（1997b、1998a・b・c）に取り上

げてきた。さらに、そこに挙げた以外で、まとまって当該分布地図を掲載する研究に次のものがある。

- ① 鏡味完二（1957）『日本地名学 科学篇』（昭和32・10、日本地名学研究所）
- ② 鏡味完二（1958）『日本地名学 地図篇』（昭和33・3、日本地名学研究所）
- ③ 日本第四紀学会（1987）『日本第四紀地図』（昭和62・7、東京大学出版会）
- ④ 日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫（1992）『図解・日本の人類遺跡』（平成4・9、東京大学出版会）

一連の拙稿及びこれらに見られる関越線群は、位置的にも、その内容的にも極めて多岐にわたる。今後は、それぞれの分布の成立背景を考慮しながら全体の特徴を明らかにしていく必要があるが、現時点において見ても、そこにいくつかの類型が認められるように思われる。

その一つは、関東の中央（おおよそ利根川付近）から新潟に抜ける境界線をもつ分布である。いま一つは、およそ北関東ないし南東

北から、中部地方を東西に横切り、北陸ないし山陰（出雲地方付近）まで抜ける境界線をもつ分布である。

いま仮に、前者を、関越線群の一つとして、「関東・越後線」と仮称し、後者を「東北・山陰線」と仮称することにする（「関東・越後線群」の一類型 概念図参照）。

具体的には、前者の例としては、方言区画論における金田一春彦博士の区画線や、方言分布における境界線の総合図（安部（1997b、1998b・c）参照）、地名の分布（鏡味完二（1957・1958）、安部（1998b）、及び本稿地図「23」「24」参照）が挙げられる。

このうち、「関東・越後線」の方の最も古いものには、現在「？」付きの分布図ながら、本稿掲載地図の「1」に挙げた「旧石器」の分布図が含まれるのが注目される（④掲載図）。

また、後者の例としては、本稿の「11」「18」や安部（1998a）に挙げた「民家の諸指標の分布」「年間平均気温の等温線」などが挙げられる。

この2つの類型のうち、後者は、総合的には気候と深く関係した境界線であることがみてとれる。前者については、利根川・江戸川・荒川などの河川に沿っていること、関東平野は古く海岸線が内陸部に深く入りこんでいたこと（安部（1998a）、本稿「25」

「26」を考慮すると、地形と関わっているようでもあるが、氣候との関わりも無視できないようである（注2）。後者の「東北・山陰線」については、時代による推移も含め、今後、当該の分布図の増加によって、再検討の余地が残る。

いずれにおいても、今後、個々の分布図を比較して検討していく必要がある、これら以外の類型の可能性とも併せて、その解釈は今後の課題であらう。

三、「関東・越後線」による東西と、

「東北・山陰線」による南北の区域

2で見た「関東・越後線群」の試論的類型である「関東・越後線」「東北・山陰線」を、その厳密な位置は別として、おおよその概念図として示したのが、「関東・越後線群」の一類型概念図である。

この2つの線の重ね合わせ図を見ると、本土における文化的特徴の分布圏も単純でないことに気付く。「関東・越後線」の東と西、「東北・山陰線」の北と南によって、その文化圏は、北東地域・北西地域・南東地域・南西地域の4つの領域に区画されることがわかる。

本稿の掲載図からもわかるように、この「東北・山陰線」での相

違には、氣候による影響が大きかったことが見てとれ（注3）、その南北では、動植物の分布までも異なっている。その意味では、この境界線は「氣候線」とも呼べる性格をもっていることがわかる（注4）。動植物において、遺伝子レベルでの相違が認められる境界線であるなら、人間の分布にも少なからぬ影響があったことが推察される（注5）。

一方の「関東・越後線」の背景については、現在のところ、地形あるいは氣候などが考慮されるが、まだ十分な資料が整っていない。地名の相違など比較的新しい要素も認められるから、「東北・山陰線」と同様に、古代における文化圏や交流圏としての相違が考慮される。

前記の4つの領域には、日本語学（方言学）の分野で各々特徴的分布が見られるが、それについては機会を改めて述べることにしたい。

四、「名付け」の一般的問題からみた 「地名の名付け」の文化的背景の問題

地名の分布にも関越線群が見られるが、地名分布の相違も一様ではなく、その問題も単純ではない。

地名の名付けと定着には、地名独自の問題もあるが、一方、一般

の事物の名付けの場合と同様の文化的問題がある。特に、広域に、かつ、多地点にわたるような共通地名の背景には、地名というものの社会的必要性や受容、あるいはまた、制度などの、複雑な要素が背景にあったことが考えられる。しかし、従来、そのような問題は必ずしも十分には検討されてこなかったように思われる。

周知のように、ヨーロッパの言語学（言語史）研究において、言語の一要素としての地名の研究が果たした役割は大きかった。一方日本の言語史研究の方ではどのようなようであったろうか。一度、名付けの一般的問題の中に置いて、日本における多様な地名の分布を、改めて見直してみる必要はないであろうか。

いま、比喩的に、“名付け”とその文化的背景の問題を二、三挙げてみたい。

例えば、コンピュータ関係では、そのハード・ウェア部門ではほとんど外来語が使われている。一方、ソフト・ウェア部門では、一太郎・松・花子をはじめ勘定奉行、特打ちなど、日本語（和語・漢語）が多く使われている。製造国・製作者とは無関係であり、後者ではどのような言葉を選ぶかは（海外向けの場合を別として）、受容する側を意識して（売れるかどうか）付けられているといっていであらう。「ハード・ウェアの名付け」の文化的背景と「ソフト・ウェアの名付け」の文化的背景が異なっているのがわかる。

車の名前もほとんどが外来語で占められている。輸出車は別として、国内限定のものであっても、和語・漢語が付けられることはない（かつて、和語「すばる」もあったが……）。車がこれほど日本社会に定着しても、車の名付けとして、我々は、和語ではなく、「外来語」を選んだということである。それは、アメリカに代表されるような「車文化」と言えるものの受容と無関係ではないであろう。

そこには、やはり、「車の名付け」の文化的問題が横たわっている。例えば、今から五千年後の人が、車名のリストのみを資料として、西暦二千年の日本車は輸入車であったとか、全て輸出向けであったとか、また、購入者が外国人であったとか、はたまた、当時の日本語は、外来語が圧倒的だったとか結論したとしたらどうであろうか。少し極端な例のように思われるかもしれないが、名付けとその受容・定着には、その名付けに使われた言葉の語源となっている言葉そのものとはまた別の、文化的背景があることがわかる。

では、地名の場合はどうであろうか。

例えば仮に、長町・五ツ橋・川内・片平・名取・古川などの和語の地名の中にまぎって、材木町・鉄砲町・国分町・花壇などの漢語起源の町名が一角を占めていたからといって、その町内の人達が漢語を多用した人達であったことを（必ずしも）意味しているわけではない。もちろん、近世や近代・現代の地名（町名）と、古代の

地名(地形名)とを同じように扱うのは不適切である。しかし、地名の語源とその地域の他の要素とが関係があるかどうかの判断においても、歴史的文化的背景を十分考慮した上で、ある種の解釈が必要となることがわかる。その解釈なしに、地名の定着までの問題を解釈していくことはできないのではなからうか。それは、たとえ過去二千年を越す古代であっても同様であろう。

どのような地形の地名がそこで広域に必要とされたのか、その地名はどのように名付けるのがふさわしいと考えられたのか、どのような地名がより定着しやすかったのか、という問題には、制度としての地名の名付けを含めた、文化的背景を考慮して検討する必要がある。これまで、古い地名の問題を、人と言語にだけ直接結び付けすぎではないなかったであろうか。

日本列島における、決して一様ではない地名分布の背景を、歴史的文化的問題の視座に置いて多角的視点から、改めて見直してみる必要があるのではないであらうか。

おわりに

ここでは、日本列島上の文化境界線“関東・越後線群”の問題に関して、特に、1文化論的問題、2境界線の類型、3地域的区分、4地名の名付けをめぐる、簡単な考察を加えた。

これら一連の関越線群と、日本語方言の分布とを照らし合わせてみると、われわれが今後見据えていかなければならないのは、この“日本語”の、世界的にもまれな類に属するであらうその“古さ”をめぐる問題であることが、次第に明らかとなってくるであらう。言語学篇の地図については、安部(1998b)などで順次その解釈を進めているが、それ以外の地図に関する解説、及び、全体にわたる考察については、稿を改めて行っていくことにしたい。

注

注1 本稿や安部1998aにも掲載させていただいた分布図を紹介する鈴木秀夫(1975・1978)の視点は、氏以外のどの研究よりも、“関

東・越後線群”をもつ分布に注意を払っているといつてよいであらう。しかし、鈴木氏も、結局それらを、中部地方を境界とする東日本と西

日本での相違と同様の、東西対立としてしか扱っておられない(参考、「本章では、東日本と西日本との間に、いかに様々な違いがあり」(鈴木秀夫(1978))。このように、これらを区別しない扱い方が、これまでの研究の一般であった。

注2 これらのような境界線と気候とを結び付けることを、何か唐突なように思われる向きもあるが、気候・環境と、文化・文明また人間との間に深い関係があることは、特に近年注目されてきていることからである(一例として、次の文献参照)。

佐藤方彦(1987)『人間と気候』(昭和62・4、中公新書)

梅原 猛・伊東俊太郎（1994）『文明と環境 I・II・III』（平成6・8、思文閣）

注3 鈴木秀夫（1975・1978）は、拙論の「関東・越後線群」のよ
うな分布を、いわゆる「東西対立」分布と区別したり、特別な名付けを
行ったりはしていないが、それらの分布の背景に、気候条件が大きく関
わっていることに、注目されている。

注4 参考までに付言すれば、土壌の性質の相違にも、この「東北・山陰
線」が認められる。日本列島の土壌の生成には、氷河期などの気候条件
が影響しているという（松井健・加藤芳朗（1962））。動植物だけ
でなく、土壌も気候と無関係でないことがわかる。

注5 土壌性質が異なれば植生が異なることになり、その草食動物やそれ
を食べる肉食動物、さらに、そこで栽培可能な作物も、当然異なってく
る。気候の相違のみならず土壌の相違によっても、古代人の栽培・農耕
はもちろん、狩猟・採集すらも、その影響を受けたことは、容易に想像
できよう。それらが相違する領域で生活することは、環境の変化に対応
できる、ある種の技術・文化が必要となったであろうことが推察される。

注6 掲載地図には、理解のたすけのための補助線として、新たに矢印・境
界線・太線などを付け加えた場合がある。

（1998・5脱稿、同・8補記）

（本学教授）

「関東・越後線群」分野別目次（注6）

「関東・越後線群」の一類型 概念図

考古学

- [1] 旧石器（石刃技法成立以前の石器群） 日本第四紀学会ほか（1992）
- [2] ①荒屋型彫刻刀形石器（新資料加筆図） 岡村道雄編（1997）
- [2] ②参考図 荒屋型彫刻刀形石器 加藤晋平（1989）
- [3] 細石刃文化遺跡の分布 堤 隆（1998）
- [4] ナイフ形石器群 岡村道雄編（1997）
- [5] 縄文人の石器道具の文化圏 佐原 眞（1987）
- [6] 縄文時代後期・晩期の漁具組成の地域性 林（1986） [国分直一（1992）より]
- [7] 弥生時代のガラスを出土した遺跡 柏原精一（1993）
- [8] 土壌墓の分布圏（弥生時代の墓制） 高倉 洋彰（1990）
- [9] 弥生時代のゴホウラ・イモガイ製貝輪及び貝輪系銅釧の出土 柏原精一（1993）
- [10] 三角縁神獣鏡の出土数 朝日新聞（1998・4・18）

民俗学

- [11] ①部屋の間取り型の分布 杉本尚次（1977）
- [11] ②参考図 部屋の間取り型の分布 杉本尚次（1969） [鈴木秀夫（1975）より]

気候学

- [12] ①最終氷期における雪線高度 小野有五 (1995)
 ステージ2 (約1〜4万年前) ・ステージ4 (約6〜8万年前)
- [12] ②最終氷期における雪線高度分布図 小野有五 (1988)
- [13] 日本の気候区分 前島郁雄 [市川正巳ほか (1967) より]
- [14] 日本の最深積雪分布 和達編『日本の気候』 [市川正巳ほか (1967) より]
- [15] 日本の根雪期間 大後美保 [市川正巳ほか (1967) より]
- [16] 日本の雪日数の分布 大後美保 [市川正巳ほか (1967) より]

土壌学

- [17] ①日本の土壌分布 松井 健・加藤芳朗 (1962)
- [17] ②参考図 日本の土壌分布 松井・加藤 (1962) [鈴木秀夫 (1975) より]

動物学

動物遺伝学

- [18] ①イエネズミの第1染色体の分布 Yosida・Tsuchiya・Moriwaki (1971)
- [18] ②参考図 イエネズミの第1染色体の分布
 Yosida・Tsuchiya・Moriwaki (1971) [鈴木秀夫 (1975) より]
- [19] 犬の遺伝子構成の犬種差 田名部雄一 (1993)

動物学

- [20] ① マダラテントウム属の分布 安江安宣 (1963)
 [20] ② 参考図 マダラテントウムシの分布 安江安宣 (1963) [鈴木秀夫 (1975) より]

植物学

- [21] アラカシの分布 Horikawa (1972)
 [22] オオイタドリの分布 Horikawa (1972)

地名学

- [23] 湿地地名 ニタ・ヌタ・ムタ 鏡味明克 (1978)
 [24] ナハ・ナバ・ナワ 鏡味明克 (1984)

地理学

- [25] 古地理図 (500-200万年前) 成瀬 洋 (1977)
 [26] 古地理図 (約10万年前) 成瀬 洋 (1977)

歴史学 (日本史学) —— 「倭」国の領域としての関東・越後線の時期の諸説

- [27] ① 「倭」国の領域 (紀元前2世紀後半) 『世界史新地図』 (1996)
 [27] ② 「倭」国の領域 (2・3世紀) 『標準日本史地図 新修版』 (1990)
 [27] ③ 「倭」国の領域 (3世紀) 『山川日本史総合図録 (増補版)』 (1997)

[27] ④ 「倭」国の領域（5世紀後半） 『カラー版世界史図説（3訂版）』（1997）

[27] ⑤ 参考図 「倭」国の領域（5世紀） 『山川世界史総合図録』（1994）

言語学（追補）

[28] ガ行子音 S D J D（1989）

参考文献（掲載地図典拠を含む）

- 『朝日新聞』朝刊「主張・解説」欄（1998）「二からわかる三角縁神獣鏡」（平成10・4・18）
- 飯田國雄・石井武夫（1997）『カラー版世界史図説（3訂版）』（平成9・10、第1刷、東京書籍）
- 市川正巳・福宿光一・山名伸作・西水孜郎・前島郁雄（1967）『地理学図集』（昭和42・5、古今書院）
- 岡村道雄編（1997）『ここまでわかった日本の先史時代』（平成9・6、角川書店）
- 小野有五（1988）『最終氷期における東アジアの雪線高度と古気候』（『第四紀研究』26、昭和63・1）
- 小野有五（1995）『最終氷期の日本列島と東アジアの古環境』（百々幸雄編『モンゴロイドの地球3 日本人のなりたち』、平成7・7、東京大学出版会）
- 鏡味明克（1978）『地名の起源』（『岩波講座日本語12 日本語の系統と歴史』、昭和53・1、岩波書店）
- 鏡味明克（1984）『地名学入門』（昭和59・11、大修館書店）
- 鏡味完二（1957）『日本地名学 科学篇』（昭和32・10、日本地名学研究所）
- 鏡味完二（1958）『日本地名学 地図篇』（昭和33・3、日本地名学研究所）
- 柏原精一（1993）『図説 邪馬台国物産帳』（平成5・1、河出書房新社）
- 加藤晋平（1989）『最古のハンター（日本のあけぼの1）』（平成1・5、毎日新聞社）
- 亀井高孝ほか2名編（1996）『世界史新地図』（平成8・4、第29版第1刷、吉川弘文館）
- 国分直一（1992）『日本文化の古層——列島の地理的位相と民族文化——』（平成4・1、第一書房）
- 児玉幸多（1990）『標準日本史地図 新修版』（平成2・4、新修第24版第1刷、吉川弘文館）

- 笹山晴生ほか6名編著(1997)『山川日本史総合図録(増補版)』(平成9・11、増補版4刷、山川出版)
- 佐原 眞(1987)『大系日本の歴史1 日本人の誕生』(昭和62・11、小学館)
- 杉本尚次(1977)『地域と民家 日本とその周辺』(昭和52・7、明玄書房)
- 鈴木秀夫(1975)『風土の構造』(昭和50・9、大明堂)
- 鈴木秀夫(1978)『森林の思考・砂漠の思考』(日本放送出版協会、昭和53・3)
- 高倉洋彰(1990)『墓にあらわれた弥生社会の特質は何か』(『争点 日本の歴史 第一巻原始編』、平成2・10、新人物往来社)
- 田名部雄一(1993)『日本犬の起源——日本人の渡来ルートとの関連——』(埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』、平成5・5、朝倉書店)
- 堤 隆(1998)『氷期の終末と細石刃文化の出現——小型石器にみる環境変動への適応——』(『科学』68・4、平成10・4、岩波書店)
- 百々幸雄編(1995)『モンゴロイドの地球3 日本人のなりたち』(平成7・7、東京大学出版会)
- 成瀬 治ほか3名監修(1994)『山川世界史総合図録』(平成6・1、第1刷、山川出版社、第6刷による)
- 成瀬 洋(1977)『日本島の成り立ち』(昭和52・6、同文書院)
- 日本第四紀学会(1987)『日本第四紀地図』(昭和62・7、東京大学出版会)
- 日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫(1992)『図解・日本の人類遺跡』(平成4・9、東京大学出版会)
- 埴原和郎(1993)『日本人と日本文化の形成』(平成5・5、朝倉書店)
- 松井 健・加藤芳朗(1962)『日本の赤色土壌の生成時期・生成環境にかんする一、三の考察』(『第四紀研究』2・4・5、昭和37・9)
- 安江安宣(1963)『「エピトウヤホンテント」 *Epilachna sparsa orientalis* DIEKE と *E. エピトウヤホンテント* *Epilachna virginicromaculata* MOTSCHULSKY の地理的分布に関する調査研究』(『農学研究』50、昭和38・3)
- 吉野正敏(1978)『気候学』(昭和53・6、大明堂)
- Toshide H. Yosida, Kimiyuki Tsuchiya, and Kazuo Moriwaki (1971) Frequency of Chromosome Polymorphism in *Rattus rattus* Collected in Japan, Chromosoma (Berl.), 33, pp.30-40.
- Yoshiwo Horikawa (1972) Atlas of the Japanese Flora: an introduction to plant sociology of East Asia, GAKKEN Co. Ltd., Tokyo.
- 安部清哉(1987)『全国方言分布の成立過程における四つの層』(『国語学会昭和62年秋季大会要旨集』(岐阜大学)、昭和62・10)
- 同 (1993a)『語の「動的運動」と音韻上の「静的作用」とによる方言分布の二重構造の「側面」』(『国語学会平成5年春季大会要旨集』、平成5

・5)

同 (1993b) 「古い方言・新しい方言」 (『言語』22-9、平成5・9)

同 (1997a) 「古代日本語の動詞重複形 (reduplication) 二種の語法と方言分布及びその言語類型地理論的問題」 (加藤正信編『日本語の歴史地理構造』、平成9・7、明治書院)

同 (1997b) 「もう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” —— 『外日本—中日本対立分布』 地図集 ——」 (『玉藻』33、平成9・8)

同 (1998a) 「日本列島上の歴史と文化におけるもう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” —— 『広日本—中日本対立分布』 地図集 (人類学・考古学・民俗学篇) ——」 (『フェリス女学院大学文学部紀要』33、平成10・3)

同 (1998b) 「日本語におけるもう一つの東西対立境界線 “関東・越後線群” —— 『広日本—中日本対立分布』 地図集 (言語学篇2) ——」 (『立正大学国語国文』36、平成10・3)

同 (1998c) 「言語地理学から見た方言境界線 “関東・越後線群” と方言区画論」 (『国語学会平成10年度春季大会発表要旨集』、1998・5・31、於白百合女子大学)

31、於白百合女子大学)

ABE Seiya (1997・7・28) 'Several Strata in the Historical Formation of Japanese Dialects', 2nd International Congress of Dialectologists & Glottologists (cf. abstracts & hand outs, 1997・7・28~8・1, Vrije Univ. in Amsterdam, The International Society for Dialectology and Glottinguistics (国際方言学地理言語学会 第2回国際大会)

あべせいや (1997) 『日本語の起源——日本語のルーツを探したら』 (アリス館、平成9・4)

【付記】

本研究は、1998年度フェリス女学院大学大学院共同研究「reduplicationに関する言語類型論的研究のための基礎的調査研究(継続)」(代表者: 安部清哉) による研究成果の一部である。

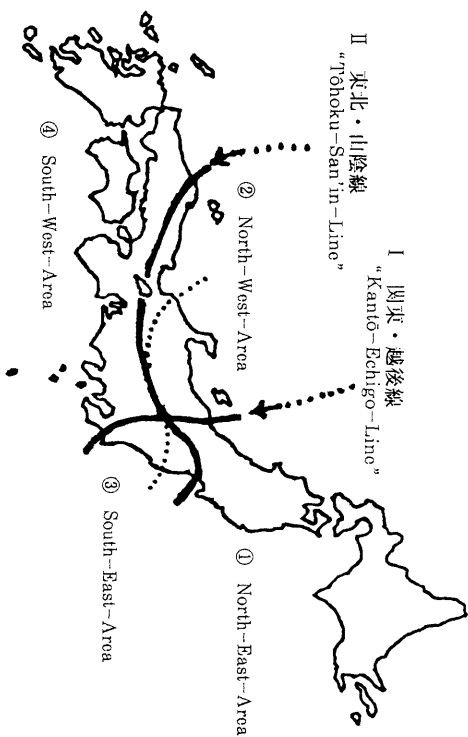
“関東・越後線群”

—人類学・考古学・民俗学・気候学篇 II—

“関東・越後線群”の一類型

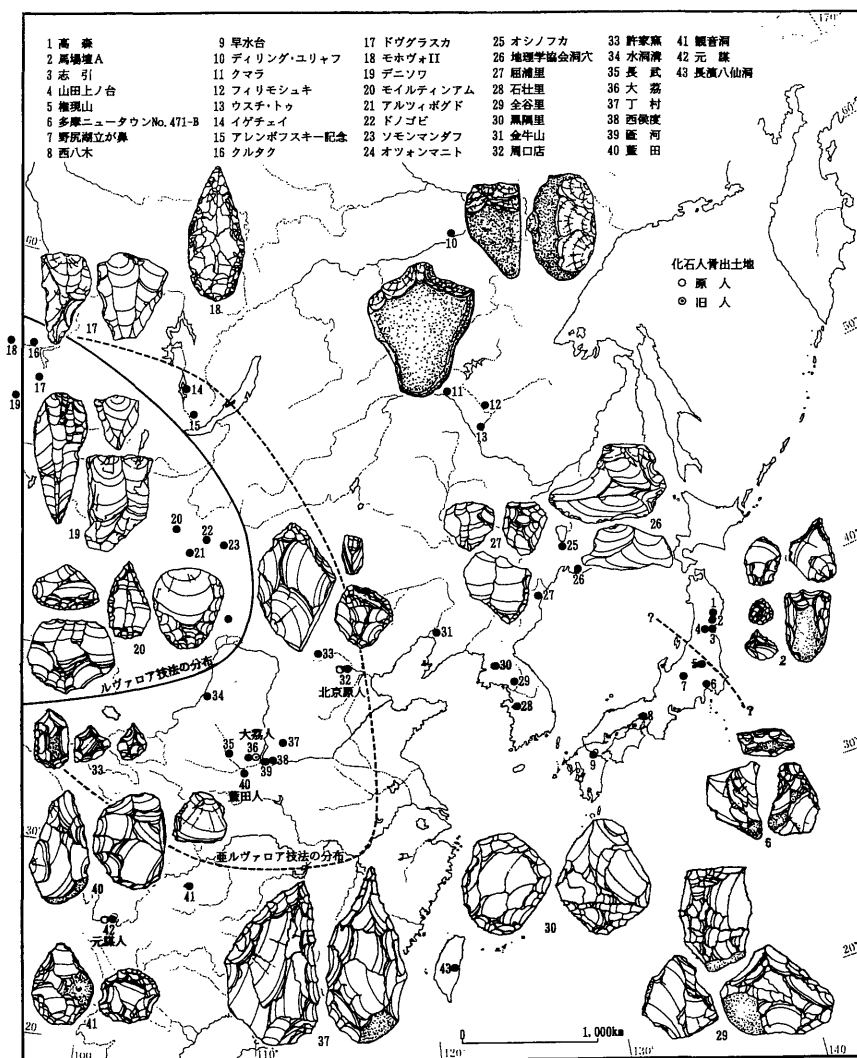
概念図

- I 関東・越後線
II 東北・山陰線 (気候線)



[1] 旧石器 (石刃技法成立以前の石器群)

日本第四紀学会ほか (1992)



旧石器 道具

【2】① 荒屋型彫刻刀形石器 (新資料加筆図)

岡村道雄編 (1997)

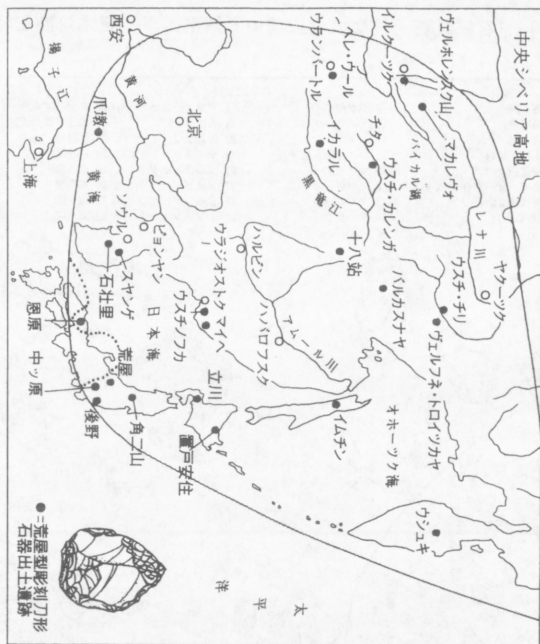
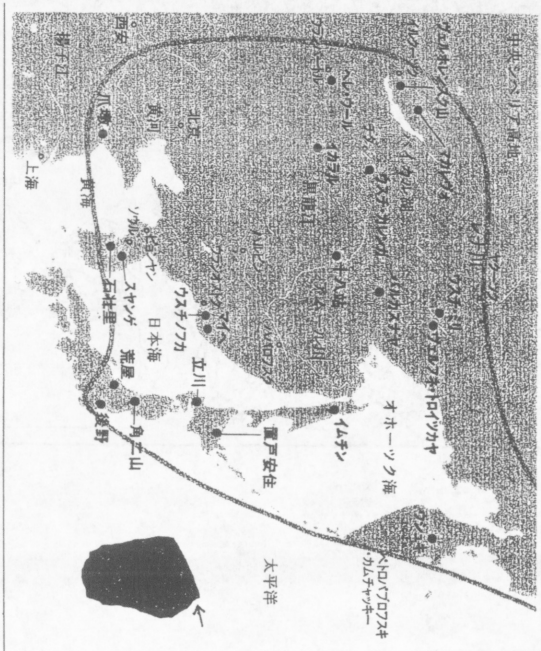


図3 荒屋型彫刻刀形石器の広がり (加藤1989に加筆)

【2】② 参考図：荒屋型彫刻刀形石器

加藤晋平 (1989)



荒屋型彫刻刀形石器の分布

[3] 細石刃文化遺跡の分布 堤 隆 (1998)

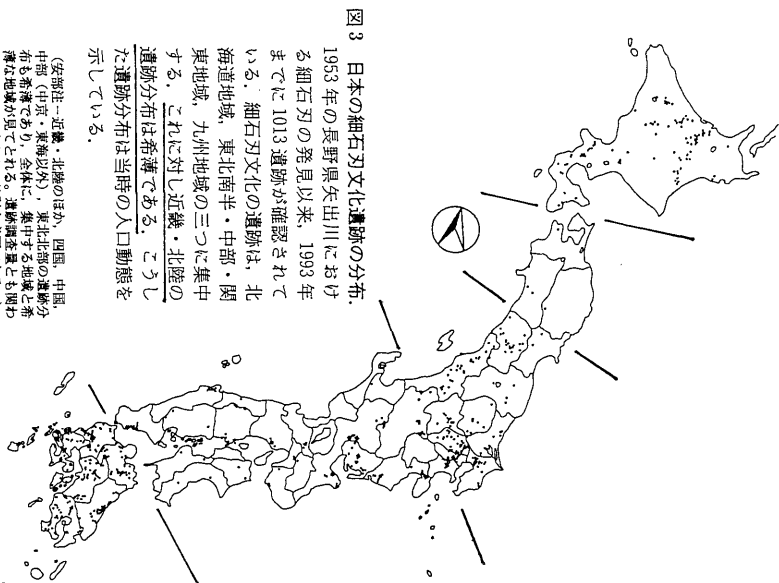


図3 日本の細石刃文化遺跡の分布。
1953年の長野県矢出川における
細石刃の発見以来、1993年
までに1013遺跡が確認されて
いる。細石刃文化の遺跡は、北
海道地域、東北南半・中部・関
東地域、九州地域の三つに集中
する。これに対し近畿・北陸の
遺跡分布は希薄である。こうし
た遺跡分布は当時の人口動態を
示している。

(安部注-近畿・北陸のほか、四国、中国、
中部(中京・東海以外)、東北北部の遺跡分
布も希薄であり、全体に、集中する地域と希
薄な地域が現れてくる。遺跡調査とも関わ
るので、その点からの検討も必要である。)

[4] ナイフ形石器群 岡村道雄編 (1997)

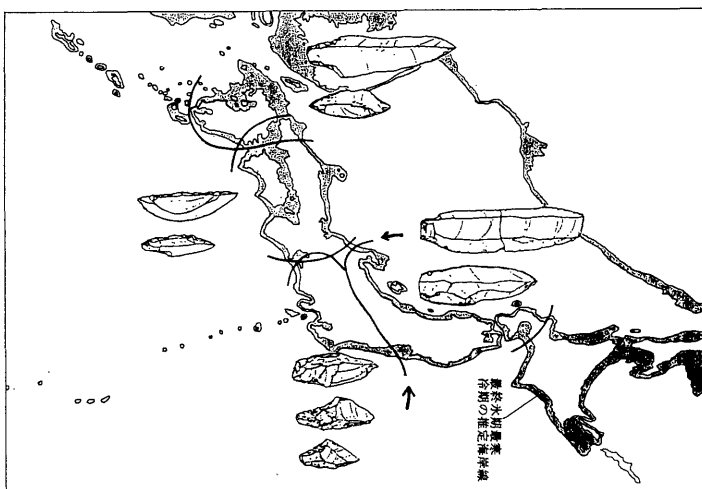
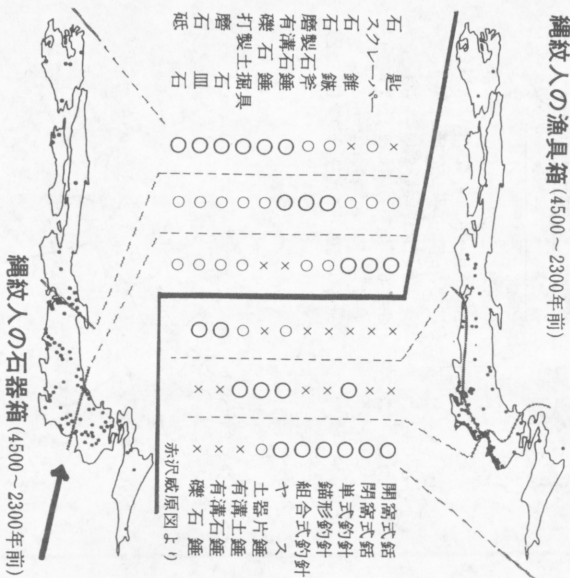


図8 ナイフ形石器群の地域性

〔5〕 縄文人の石器道具の文化圏 佐原 眞 (1987)



〔6〕 縄文時代後期・晩期の漁具組成の地域性
林 (1986) [国分直一 (1992) より]

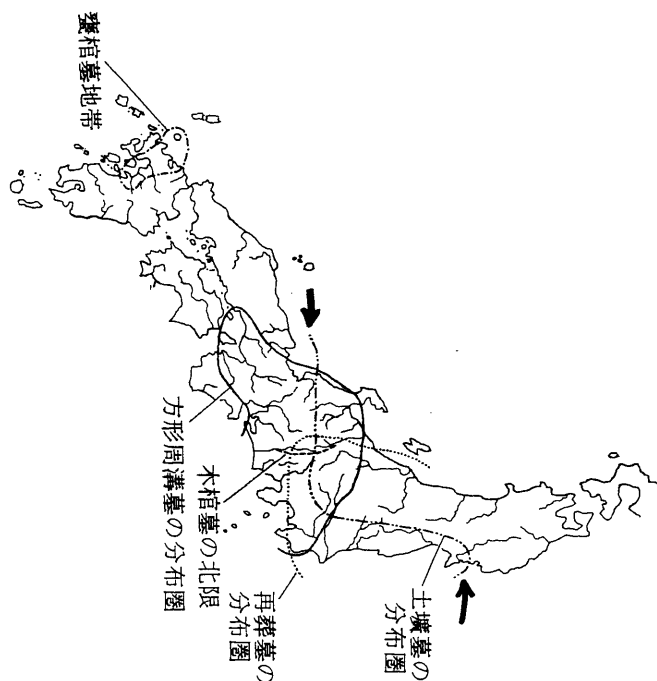


4. 縄文後・晩期の漁具組成の地域性 (林 1986 年所収)

〔7〕 弥生時代のガラスを出土した遺跡 柏原精一 (1993)



〔8〕 土壇墓の分布圏 (弥生時代の墓制) 高倉 洋彰 (1990)



〔11〕 ①部屋の間取り型の分布 杉本尚次 (1977)

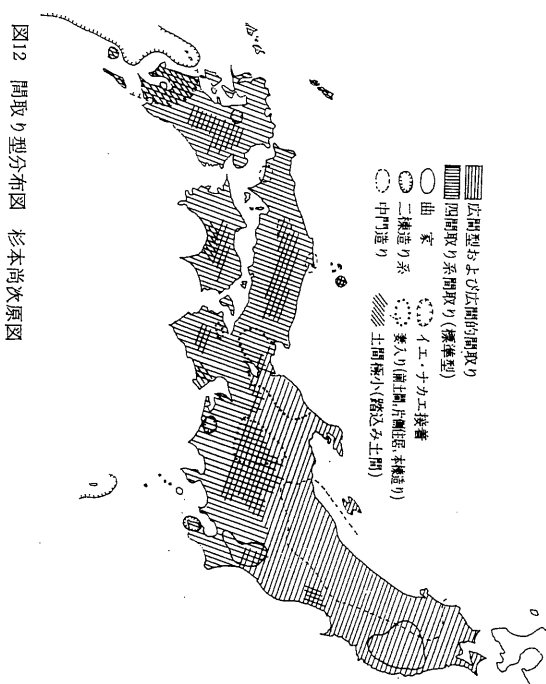
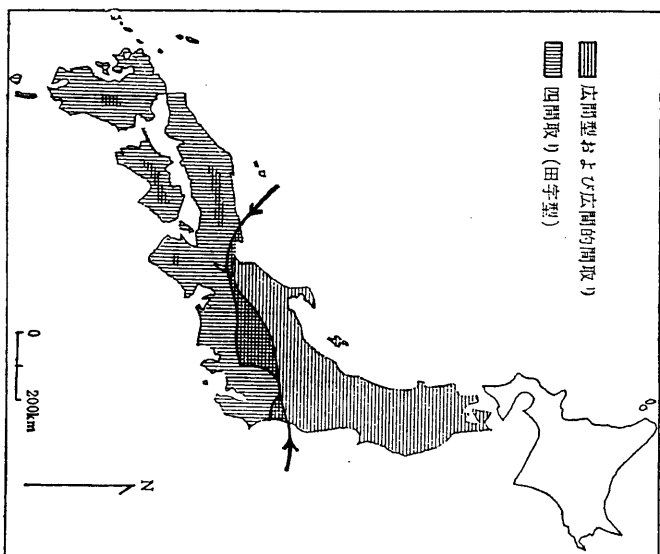


図12 間取り型分布図 杉本尚次原図

〔11〕 ②参考図：部屋の間取り型の分布 杉本尚次 (1969) [鈴木秀夫 (1975) より]



第38図 部屋の間取り型の分布 (杉本 1969より簡略化)
(北海道については資料の提出がない)

[12] ①最終氷期における雪線高度 小野有五 (1995)
 ステージ 2 (約 1 ～ 4 万年前) ・ ステージ 4 (約 6 ～ 8 万年前)

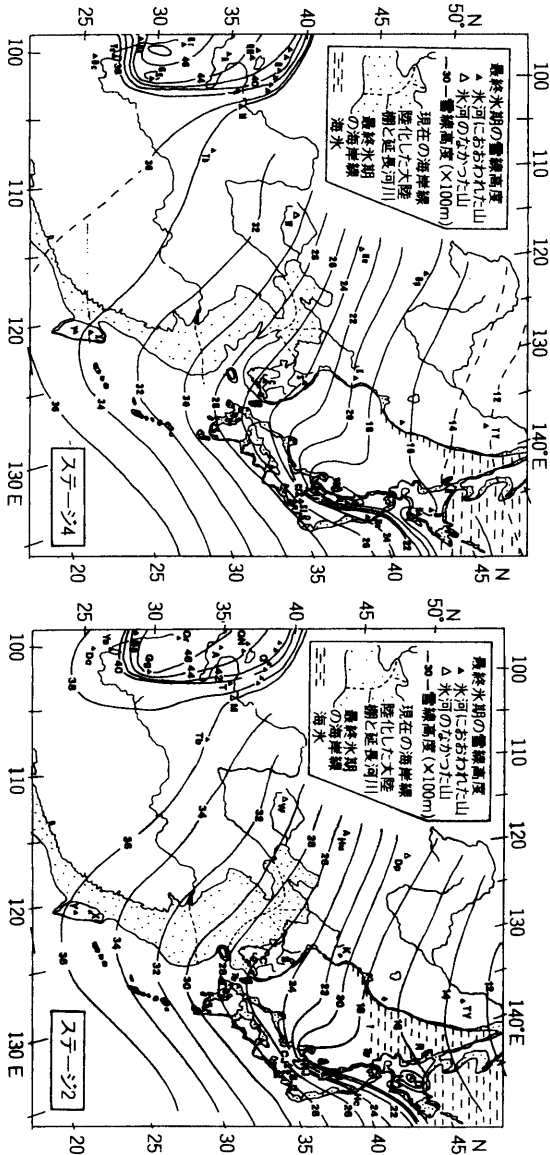
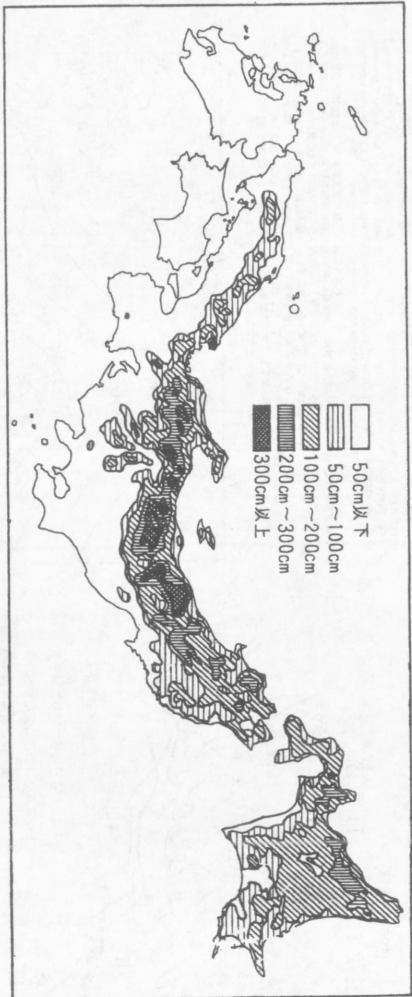


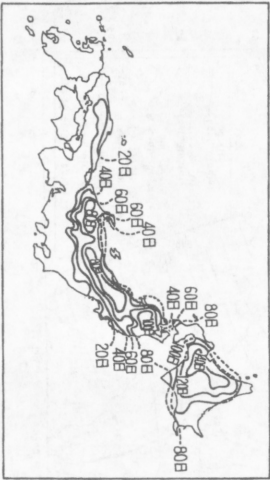
図 10. 最終氷期のステージ 4 と ステージ 2 における東アジアの雪線高度

山名・山脈名: (青藏高原) Q: 祁連山脈, QN: 青海南山, A: 阿尼瑪卿山, T: 達理加山, M: 馬明山, Qr: 雀兒山, Gg: 貢嘎山, Dc: 点蒼山, Bs: 白馬雪山, Ys: 玉龍雪山, (中国東部) Tt: 太白山, W: 五白山, (台湾) X: 雪山, Y: 玉山, (中国東北部) Hu: 黃崗梁, Dp: 太平嶺, (日本) Sj: 南アルプス (赤石山脈), Cj: 中央アルプス (木曾山脈), Nj: 北アルプス (飛騨山脈), I: 飯倉山, G: 月山, Hc: 早池峰山, H: 日高山脈, D: 大雪山, R: 利尻岳, (韓国) S: 雪岳山, C: 智異山, (北朝鮮) K: 冠嶺山, (ソ連) Ty: タルディヤニ山, 雪線高度は 100 m 単位. (文献 4 より)

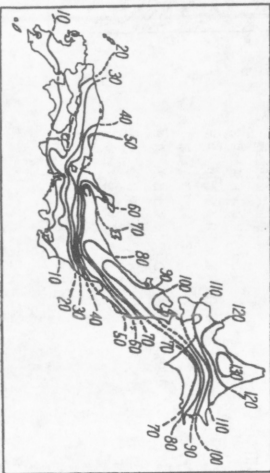
- [14] 日本の最深積雪分布 和達編『日本の気候』[市川正巳ほか(1967)より]
- [15] 日本の根雪期間 大後美保『市川正巳ほか(1967)より』
- [16] 日本の雪日数の分布 大後美保『市川正巳ほか(1967)より』



① 日本の最深積雪分布 (日本の気候・和達編より)



② 日本の根雪期間 (大後美保)

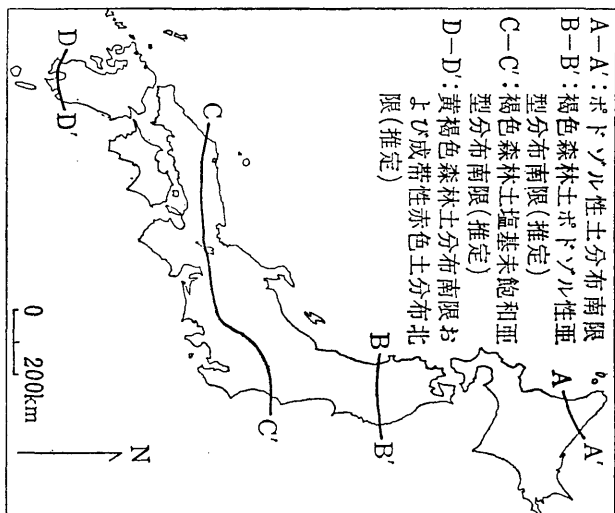


③ 日本の雪日数の分布 (大後美保)

[17] ①日本の土壌分布 松井 健・加藤芳朗 (1962)



[17] ②参考図：日本の土壌分布
松井・加藤 (1962) [鈴木秀夫 (1975) より]



第30図 日本の土壌分布図
(松井・加藤 1962)

[18] ① イエネズミの第1染色体体の分布
Yosida・Tsuchiya・Moriwaki (1971)

T. H. Yosida, K. Tsuchiya, and K. Moriwaki:

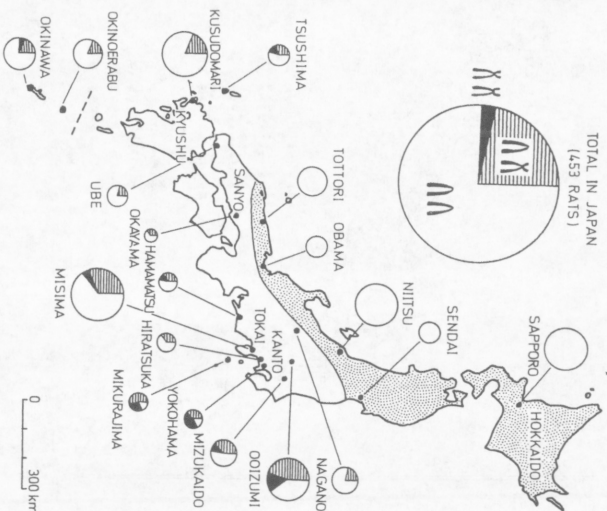
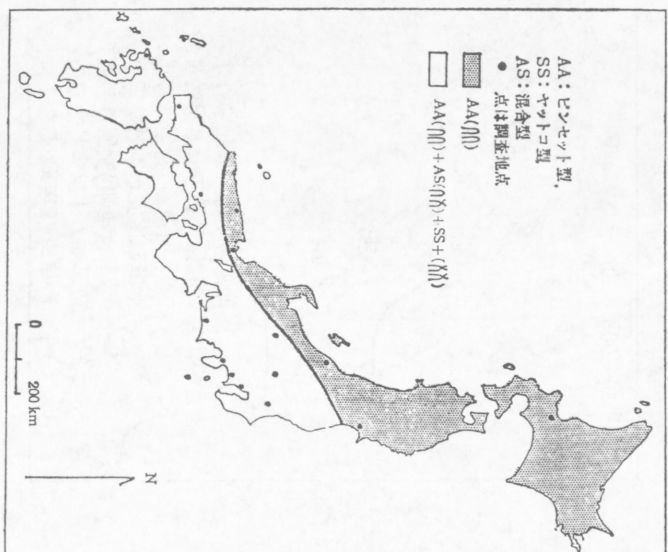


Fig. 5. Population map of the frequency of No. 1 chromosome polymorphism in *Rattus rattus* collected in Japan. Population size is indicated by dimensions of circles, in which white, hatched and black areas show the frequency of animals with A/A, A/S and S/S chromosome pairs, respectively. The dotted area represents Northern and Northwestern Japan where only A/A (No. 1) chromosome type were found

[18] ② 参考図：イエネズミの第1染色体体の分布
Yosida・Tsuchiya・Moriwaki (1971) [鈴木秀夫 (1975) より]



第32図 イエネズミの第1染色体体の分布
(Yosida・Tsuchiya・Moriwaki 1971)

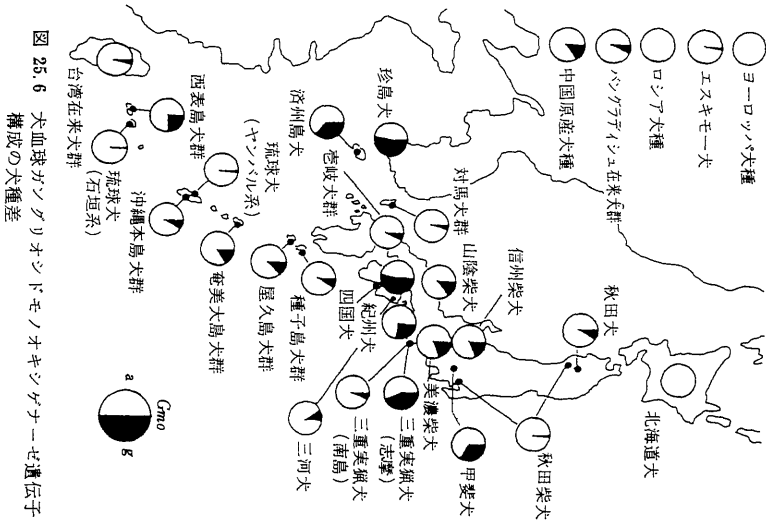
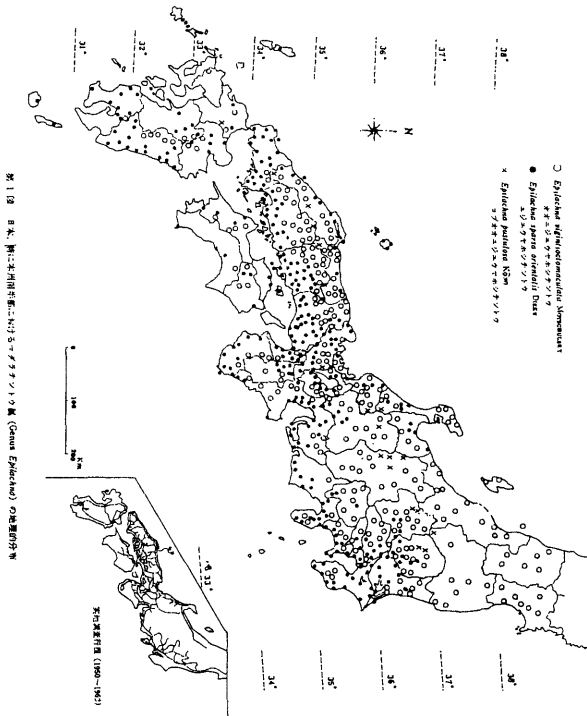
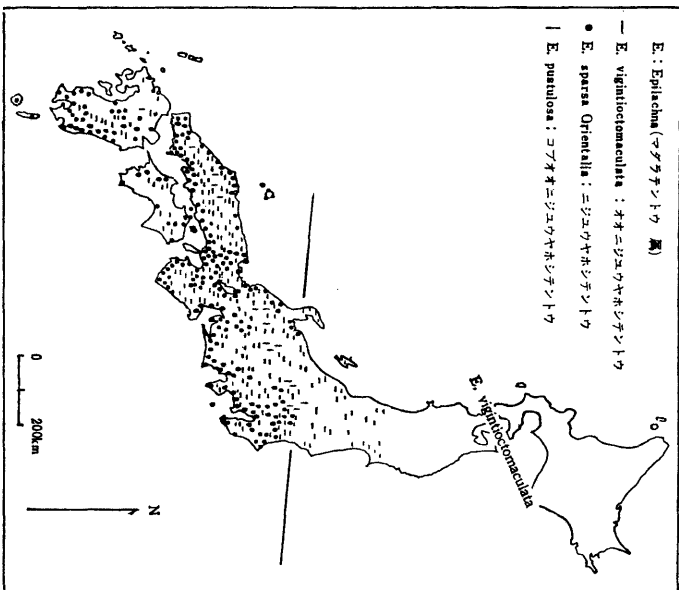


図 25.6 犬血球ガンダリオンドモノオキシゲナーゼ遺伝子構成の犬種差

[20] ① マダラテントウ属の分布 安江安宣 (1963)

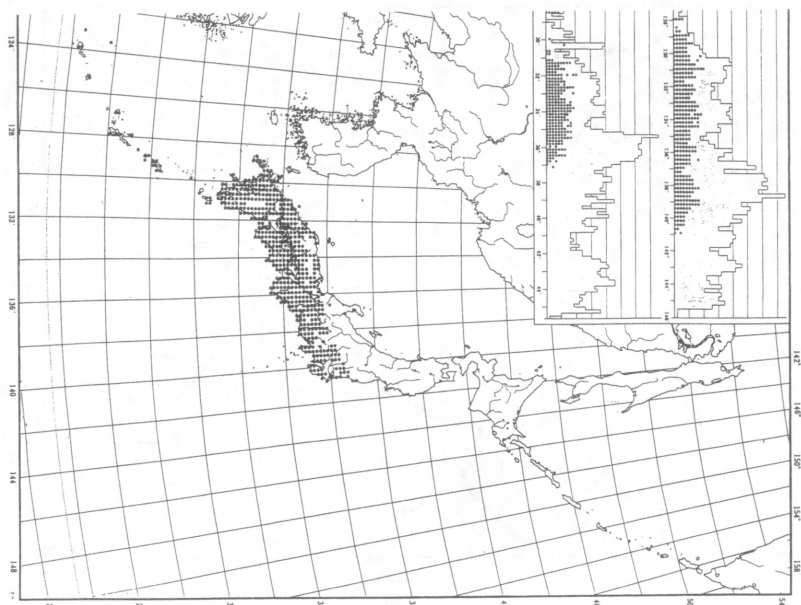


[20] ② 参考図：マダラテントウ属の分布 安江安宣 (1963) [鈴木秀夫 (1975) より]



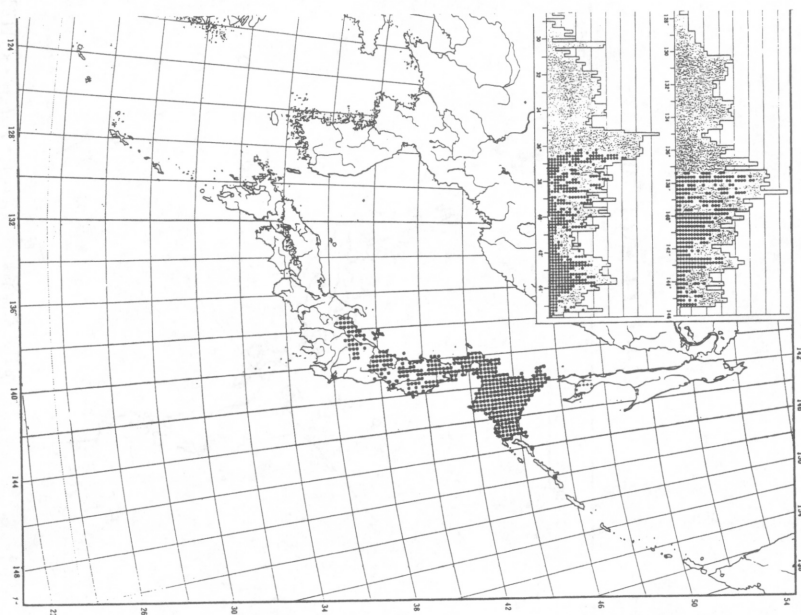
[21] テラカシの分布

Horikawa (1972)



[22] オオイタダリの分布

Horikawa (1972)



[25] 古地理图·(50—20万年前) 成瀬 洋 (1977)

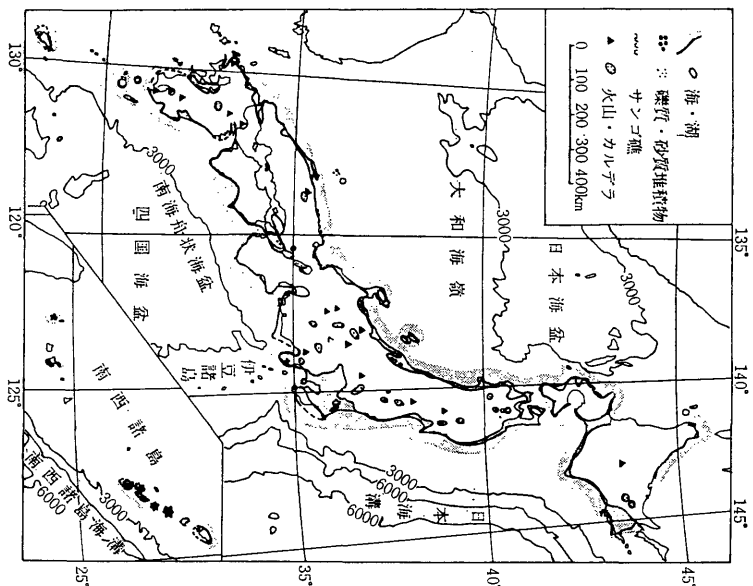


图 52-a. 古地理图 1 (50~20 万年前)

[26] 古地理図 (約10万年前) 成瀬 洋 (1977)

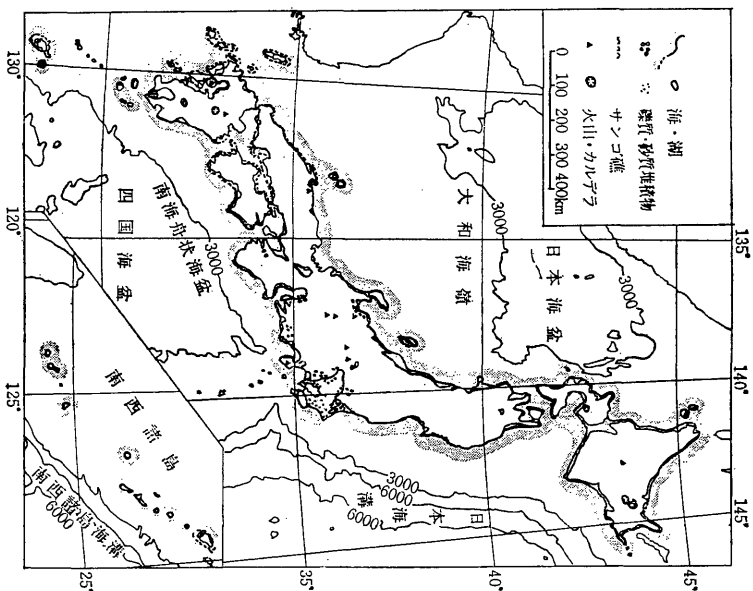
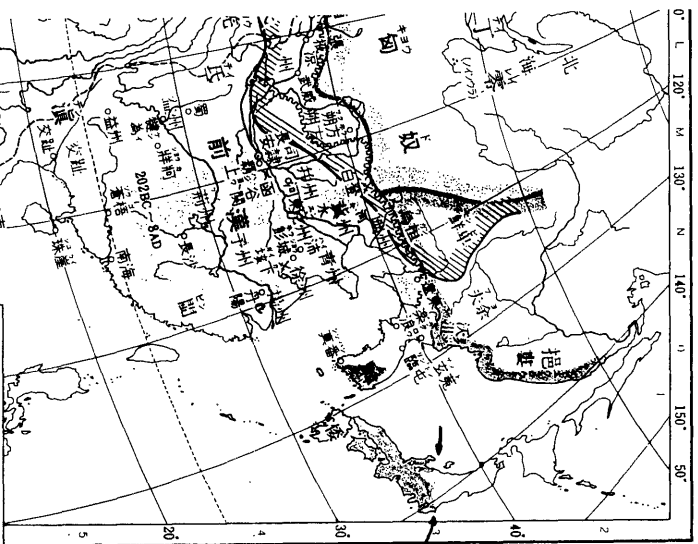


图 52-b. 古地理图 2 (约 10 万年前)

歴史学（日本史学）——「倭」国の領域としての関東・越後線の時期の諸説

[27] ①「倭」国の領域（紀元前2世紀後半）

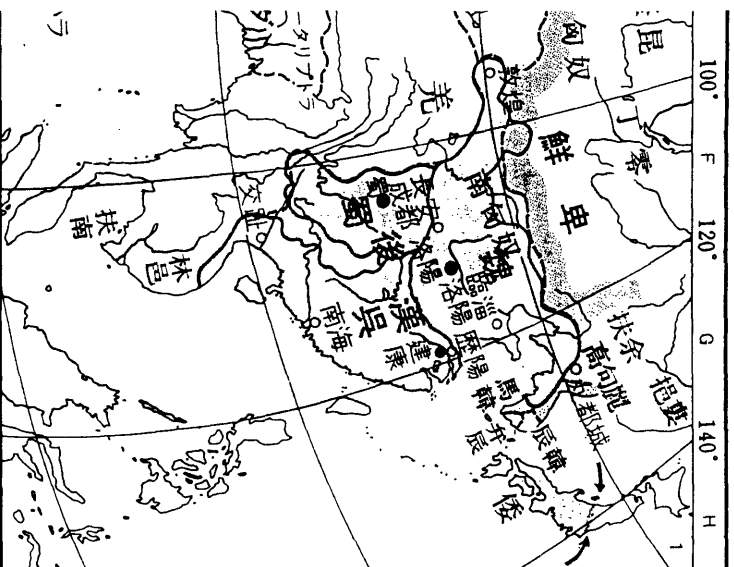
『世界史新地図』（1996）



7 前四—二世紀のアジヤ

[27] ②「倭」国の領域（2・3世紀）

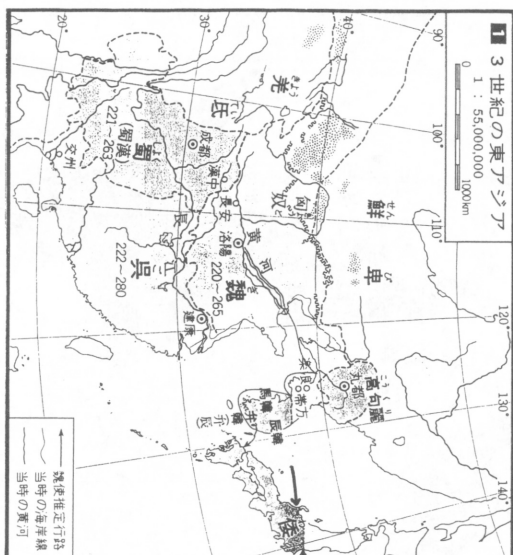
『標準日本史地図 新修版』（1990）



[27] ③「倭」国の領域（3世紀）

『山川日本史総合図録（増補版）』（1997）

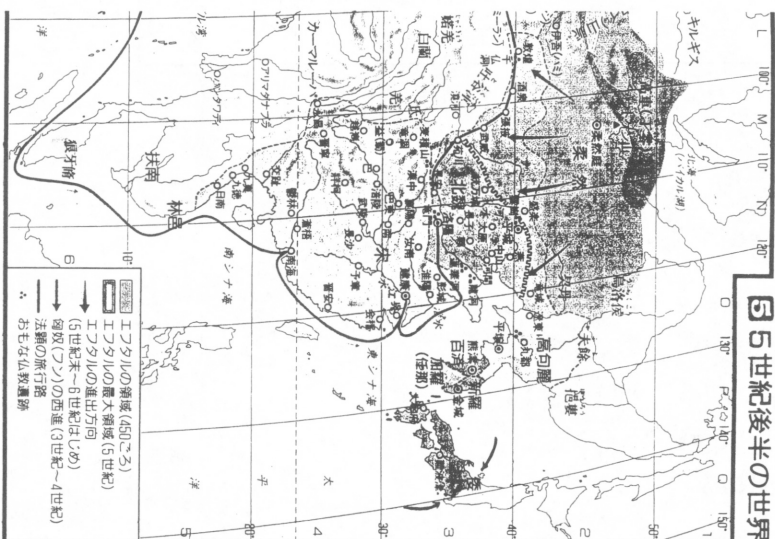
12 邪馬台国と東アジア



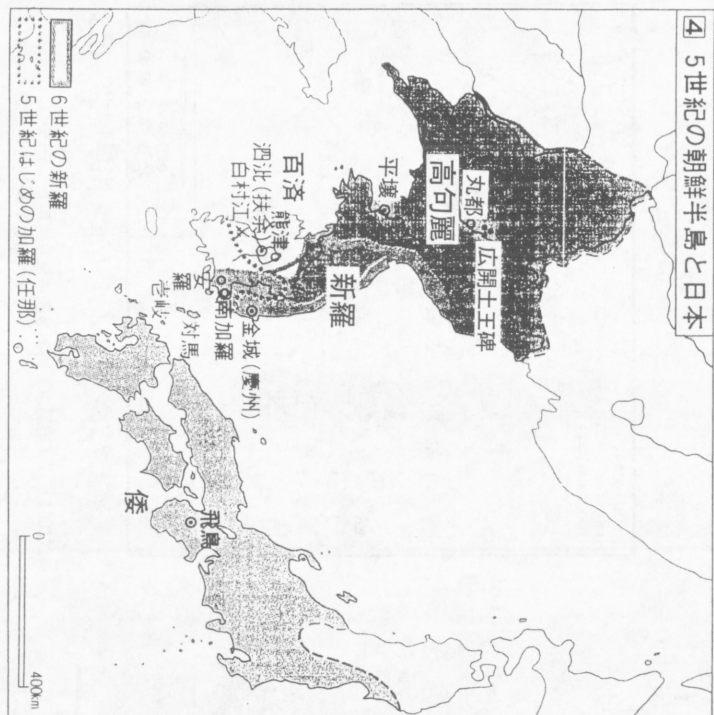
[27] ④「倭」国の領域（5世紀後半）

『カラー版世界史図説（3訂版）』（1997）

5 5世紀後半の世界



[27] ⑤ 参考図：「倭」国の領域（5世紀）
『山川世界史総合図録』（1994）



言語学 (通補)

[28] Consonant / g /
([in a word head] / [between vowels]) from S D J D

